



小木曾 健 Ogiso Ken

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター 客員研究員

講演やメディア出演を通じ、ネットで絶対に失敗しない方法を伝えている。全国の企業・学校などで2,000回以上の講演。著書に『ネットで勝つ情報リテラシー』（筑摩書房、2019年）ほか多数

フェイクニュース(1)

今や「フェイクニュース」という言葉を耳にしない日はありませんが、実はここ1～2年で、これまでの「愉快犯」的なフェイクから、民主主義の根幹を揺るがしかねない深刻なものへと変貌しつつあります。インターネット（ネット）で何が起きているのか、私たちはフェイクにどう立ち向かえばよいのか、考えてみましょう。

フェイクは3種類

フェイクニュースにはさまざまなパターンがありますが、情報リテラシーの世界では、大きく3つの種類に分けて考えます。

1つ目は「ニセ情報」。意図的に作り出されたフェイク。わざと作り出したウソ。わざとですからね、非常に悪質といえるでしょう。

2つ目は「誤情報」。これは、悪気はないけどウっかり間違えてしまったものや、誤解から拡散してしまったデマなどです。悪意がないとはいえそれが社会に与える影響は大きく、やはり看過できません。

3つ目は「マル情報」（悪意ある情報）。内容に誤りはないけど、受け手が誤解するように仕向けた情報です。事実の一部だけを切り取って伝える、誤解されそうな見出しを付ける……つまりは「勘違いさせる」ことをねらった情報なのですが、実はマスコミやネットニュースがよく使う手法でもあります。厳密にはフェイクニュースに該当するものですからね、良くないですね。

- ・ニセ情報（わざと）
- ・誤情報（ウっかり）
- ・マル情報（勘違いさせたい）

私たちを悩ませるこれらのフェイク、実はネット登場よりもずっと前から世の中に存在しています。ネットがフェイクを生み出すのではなく、その発信源は今も昔も人間なのです。この点だけはしっかり押さえておきましょう。

フェイクニュースが急増した理由

とはいえ、誰もがネットでSNSを使うようになった結果、フェイクニュースが増加したのも事実。デマが広がるスピードも格段に速くなりました。特にここ1～2年の、フェイクニュースが社会を混乱させる状況は異常ともいえますが、こんな事態をもたらした要因は2つ挙げられます。「報酬」と「生成AI」です。

2年ほど前から、X（旧Twitter）はユーザー投稿に対し、閲覧数に応じた報酬（お金）を支払うプログラムを開始しました。このプログラムに登録すると、自分の投稿が**バズる**（激しく拡散する）度に数万円単位の報酬を得られるのですが……こんな仕組みがあれば「バズらせるためなら何でもやろう」という人が出現するのも当然であり、ほどなくXは、災害時に「ウソの救助要請」を投稿したり、「拡散しやすいデマ」を捏造・投稿するような輩であふれ返るようになりました。報酬、これが1つ目の要因です。

2つ目は生成AIの急激な進化です。今やスマホ1つで、誰でも簡単に、パッと見ただけではウソだと見破れないニセ画像やニセ動画を作れるようになりました。もちろん専門知識は不要です。フェイク情報は画像や動画を添えることで、より拡散されやすくなるので、フェイクの製作者が生成AIを悪用しないはずもなく……今やネットは、本物と見分けのつかないニセ画像が添えられたフェイクであふれ返っています。これが2つ目の要因。

どちらもこの数年で起きた出来事ですが、こ

の2つの要因で、フェイクニュースをめぐる状況は格段に悪化したといえます。

私たちはなぜ騙されるのか

意外に思われるかもしれませんが、実は私たち人間は、元々「ウソを信じたがる」生き物です。無意識のうちに騙される方向に向かって歩き出してしまふ。なぜなら、誰もが「認知バイアス」という特性を持っているからです。

認知バイアスとは、例えば、プロ野球の試合でポールぎりぎりに飛び込む際どい打球。ホームランかファウルか分からないのに、双方のファンは「危なかった、ファウルだ!」「いや! ホームランだ!」と勝手に判断し、歓声を上げて喜ぶ……よくある光景ですよね。同じ景色を見ているのにまったく違う反応をしている人たち。これは無意識のうちに、自分が欲しい答え(ファウルorホームラン)を先に決めていているということ。その結果、目の前の光景すら都合よく見えてしまふ。これが認知バイアスです。人間は自分が信じたいものを先に選び、後から「それを選んだ理由」を考える生き物なのです。フェイクの作り手たちは、この特性を悪用します。

フェイクには、たいてい「誰かに教えない」「許せない」「意外だ」といった要素が組み込まれています。実はこれらの感情も私たちの認知バイアスを刺激するのです。

だって誰かに教えないのに、それがウソだったら教えることができなくなってしまう。教えないな、本当だったらいいな、多分、本当だろうな……そんな感情(=認知バイアス)が、本来必要なチェックをおろそかにさせ、フェイクを拡散させてしまうんですね。

フェイクの作り手は、認知バイアスをよく理解しています。だからほとんどのフェイクニュースには、認知バイアスを刺激する要素が何かしら組み込まれているのです。

逆にいえば「誰かに教えない」「許せない」「意外だ」と感じたときには「フェイクかもしれない」と身構えるくらいでちょうどよいでしょう。

気がつけば囲まれていた

今や私たちの生活にすっかり溶け込んだSNSですが、実はSNSの機能自体にもフェイクニュースを強化、拡散させる要素があります。

たいていのSNSは掲載される広告で運営費を賄っているため、ユーザーにはできるだけ長くSNSを見続けて欲しい、が本音です。そのほうが広告収入を増やせますから。

だからユーザーの好みを分析し、その人が見続けたいような投稿を、ひたすら表示するのです。ではもしユーザーが、何かしらのフェイクに興味を示したら……SNSは同じようなフェイクをどんどん表示し続けるでしょう。そんなものを延々と見せられたら、やがて「……本当なのでは」と信じてしまふ。——**フィルターバブル**と呼ばれる現象です。

SNSは「あなたが見たいもの」を見せる道具ではありません。「あなたに見せたいもの」を見せてくる道具です。しかも私たちは、その事実になかなか気づけないのです。

私たちはどうすればよいのか

実は、2020年頃までは「フェイクニュースを見破るコツ」というものが存在していました。
①情報の出どころは？ ②画像はホンモノ？
③専門家の意見なの？ の3点が基本セットでしたが、残念ながらもう、②と③は使えません。

以前だったら、フェイクに添えられる画像は「無関係の画像から流用」が相場でしたので、画像検索で元ネタ画像を見つければ、フェイクだと判断できました。ところが添えられる画像が生成AIで作られたものとなり、②のチェックが無意味になってしまったのです。③についても、新型コロナ禍にフェイクを信じてしまう専門家が續出……専門家の見解であるか否か、というチェック効果が著しく下がってしまいました。もはや、フェイクニュースに対抗する術はないのでしょうか？ いえ！ 大丈夫です。次回はフェイクとの新しい戦い方についてお話しします。